

国鉄分割民営化に

動労千葉はなぜストライキで闘ったのか？

○国鉄分割民営化

1987年4月1日に国鉄が分割・民営化されてから、今年でちょうど20年が経った。国鉄分割民営化とは、国家権力が総力を挙げて国鉄労働運動をつぶそうと襲いかかってきた戦後最大の反動攻撃であった。

当時の首相中曽根は民営化の狙いをこう語った。

- ① 国労をつぶし総評・社会党を壊滅に追い込むこと
- ② 行政改革によって立派な憲法を床の間に安置する
(憲法を改悪すること)

しかし敵の最大の狙いであった「国鉄労働運動つぶし」は破産し、40人もの解雇者を出しながら動労千葉は断固団結を守りぬき、団結を堅持しながら今もJR下で闘っている。



○民営化に対してストライキで闘うということ

国鉄分割民営化にあたって、国鉄労働者に対して「ヤミ・カラキャンペン」が大々的に行われていた。ちょうど、今の社会保険庁の労働者にかけてられている攻撃と同じ状況。今、社会保険庁労働者に対して「消えた年金は社会保険庁の労働組合がさぼっていたからだ」、「45分タッチして15分休憩、小学生の休み時間ですか？」と年金問題を労働組合のせいに、ボーナス返上を拒否した職員は年金機構に雇用しないという攻撃がかけられている。20年前の国鉄労働者にも全く同じ攻撃がかけられていた。「国鉄が赤字なのは、国鉄の組合が働かないからだ」、「勤務時間に風呂に入っている、酒を飲んでいる」、「国賊だ」と言われ民営化で、3人に1人でクビになるといわれた。こういった状況の中、国鉄職員200人が自殺に追い込まれていた。このような状況の中で、動労千葉がストライキをすれば「全員解雇」と言われていた。

では、このような中で動労千葉はなぜ二波のストライキを行ったのでしょうか？

○二波のストライキの意義（俺鉄2 p161 下より）

- ① 戦後最大の労働運動解体攻撃に対して、唯一動労千葉の労働者の誇りをかけて闘い、「ノー」と言える労働組合があること、「屈服しないぞ」ということを示せた。
- ② 動労千葉が闘うことで国労が残るという事態を作り出し、国労が連合に参加しないということをとおして、国労つぶし、国鉄労働運動をつぶすという敵の狙いを阻んだ。
- ③ 国鉄分割民営化が強行されてなお動労千葉が残り、解雇者1047名闘争と言われる民営化の闘いを今も継続しており、動労千葉のストライキがその基礎をなした闘いをした。